

『自負と偏見』におけるリディア・ベネットの グレットナ・グリーン婚 —— 物語への効果と役割 ——

Lydia Bennet's Gretna Green Marriage: Its Effects and Roles in *Pride and Prejudice*

山 館 香 菜

序論

ジェーン・オースティンの『自負と偏見』は、18世紀のロンドン郊外の田舎町ロンボーンを舞台とし、中流階級のベネット家の5人姉妹を取り巻く恋愛や結婚と、当時の人びとの階級意識がふんだんに盛り込まれた小説である。

年頃の娘ばかりを5人も持つベネット家では、父親のベネット氏が死ねば家も土地も遠縁の親戚の手へと渡ってしまう。そのためベネット夫人は娘たちに婿を探そうと躍起になっていた。そのようなときに、資産家のビングリーが屋敷の近くに越してくる。長女のジェーンは、母親の思惑どおりビングリーと恋仲になるが、次女のエリザベスはビングリーの親友ダーシーの高慢な態度に反感を抱く。さらにそのとき町に駐留していた軍隊の青年士官ウィカムに惹かれたエリザベスは、彼からダーシーの良くない噂を聞き、ますますダーシーに対する嫌悪感を募らせる。一方、ダーシーは次第に知的で賢明なエリザベスに惹かれていき求婚するが、断られてしまう。しかし、ダーシーからの手紙をきっかけにエリザベスは自分自身が抱いていた多くの偏見に気づいていく。叔父夫婦との旅行先で、偶然会ったダーシーの紳士的な態度に感動しているエリザベスに、5女のリディアがウィカ

ムと駆け落ちしたとの知らせが入る。その後ダーシーがリディアとウィカムを見つけ出し騒ぎを収拾してくれたと知ったエリザベスは彼の愛情の深さを知る。そして、いったんは離れ離れになりつつも別離に耐えたジェーンとビングリー、しだいに互いを理解するにいたったエリザベスとダーシーの二組はめでたく結婚を果たす、というようにこの物語は、5人姉妹の中でも長女ジェーンと次女エリザベスが紆余曲折を経て幸せな結婚にいたるところを軸としている。

従来の先行研究においても、門田守『『自負と偏見』における男と女——ヒロインの成長と父性主義の原理』や川口能久『『高慢と偏見』論——エリザベスとダーシーについて』などに代表されるように、この小説は次女エリザベスを主人公に、エリザベスの結婚相手であるダーシー、長女ジェーン、その相手ビングリーを中心人物とした物語として読まれることが多かった。しかし、本論文においては、5女リディアと士官ウィカムの駆け落ちに注目していきたい。

1796年に原型である作品『第1印象』が書かれ、1813年に出版された『自負と偏見』であるが、この当時、つまり、18世紀半ばから19世紀のイギリスは、イングランドとスコットランドの婚姻法の違いから、イングランドに住む人々によるスコットランドへの駆け落

ちが流行した時代であった。中でも、イングランドとの国境に位置するスコットランド南部の町グレットナ・グリーンといえば駆け落ち婚の聖地と言われるほどであった。

オースティンは、執筆した長編小説6作品のうち3作品に駆け落ちエピソードを盛り込んでいるが、中でもこの『自負と偏見』に限っては駆け落ちの地をはっきりグレットナ・グリーンと言及している。主に結婚をその中心テーマとするオースティンの作品群において、彼女の描く幸せな結婚の裏に、グレットナ・グリーン駆け落ち婚の影がこの作品に何らかの意味を持たせていると考えられる。そこで、以下においては、従来エリザベスとジェーン、そしてその結婚相手を中心に読まれてきたこの作品について、あえて脇役として登場する末娘のリディアと士官ウィカムに着目し、彼らのグレットナ・グリーンへの駆け落ち騒ぎがこの作品の中で、どのような役割を果たし、他の登場人物や物語にどのような影響をもたらしているのかを考察していきたい。そこでまずは当時のグレットナ・グリーンをめぐる社会背景に注目することからはじめ、実際のグレットナ・グリーンと小説の中のグレットナ・グリーンの描かれ方とを比較し、小説の中のグレットナ・グリーンへの駆け落ちがいかに実態にそぐわないものであったかを検証する。次に性格、恋愛、結婚の面から、リディアと主要人物であるエリザベスおよびジェーンを比較することで、リディアの存在と、未遂に終わりあくまで駆け落ち“騒ぎ”として物語の中に盛り込まれているリディアとウィカムのグレットナ・グリーンの駆け落ち騒ぎの位置づけや効果を探る。そして最後にこの駆け落ち騒ぎによってエリザベスとダーシーがそれぞれ自己と向き合い、内面的変化をもたらされるに至るというこの駆け落ち騒ぎの効果的な役割を検証していきたい。

1. グレットナ・グリーン

1-1 グレットナ・グリーン駆け落ち婚流行の社会背景

グレットナ・グリーンとは、イングランドとスコットランドの境界に位置するスコットランド南部の地名であり、現在はスコットランド随一の結婚式場として栄えているが、18世紀半ばから19世紀半ばにかけては、イングランドの人々の駆け落ち婚の聖地となった町である。まずなぜグレットナ・グリーン駆け落ち婚が流行するようになったのか、その社会背景を押えておきたい。

グレットナ・グリーン駆け落ち婚が流行する契機となったのは、1754年に制定されたハードウィック婚姻法である。この法律の施行以前のイングランドにおける結婚は、1604年の教会法によって確立していた国教会式教会挙式婚という正式な方法があった。しかしこの方法は第3者からの異議申し立てがなく婚姻に支障がないことを確認するため、挙式前の3週連続した日曜日に教会において婚姻予告が読み上げられなければならなかったため、とても時間を要するものであった。その上、婚姻予告の公表中はたとえ法的に正式な婚姻であっても、第3者が異議申し立てをし、結婚を妨害することができてしまうため、結婚が私的なものではなくなってしまっていた。そのため、対抗手段のようにイレギュラー・マリッジというものが広く行われていた。イレギュラー・マリッジとは、2人以上の立会人のもとで、結婚の誓いをするという国教会式教会挙式婚に比べごく簡単な方法であり、法からは逸脱しているが社会的には承認され有効と見なされていた。しかし、そのあまりの簡単さ故にイレギュラー・マリッジを利用した借金逃れのための結婚や結婚詐欺、重婚などの社会問題が増加し、財産目当ての誘拐婚などの事件もしばしば起こるようになっていった。そこで、重婚や誘拐婚の被害者、そ

して、結婚によって財産や爵位の継承が脅かされるのを危惧した上流階級の人々から、婚姻法を整備するよう要求が高まっていった。そうして成立したのがハードウィック婚姻法であった。この法律によって、国教会式教会挙式婚へ法的拘束力が与えられ、21歳未満の者の結婚には親・保護者の同意が必要不可欠なものとなり、イングランドにおけるイレギュラー・マリッジが完全に違法なものとなった。これで重婚や誘拐婚の被害、結婚による財産流出などへの心配がなくなったかのように思われた。しかしながら、そこにはスコットランドへと続く抜け道が存在していた。連合条約において独自の法を持つことを保障されていたスコットランドにおいては、ハードウィック婚姻法は適応されず、従来どおりイレギュラー・マリッジが可能であったのである。つまり、この法律は、イングランドにおけるイレギュラー・マリッジは取り締まったものの、重婚や誘拐婚、そしてイレギュラー・マリッジの舞台をイングランドからスコットランドへと移しただけであったのだ。こうして、イングランドの人々のスコットランドへの駆け落ちが流行し始めるのだが、とりわけその駆け落ちの場として選ばれ、駆け落ち婚の聖地とまで言われるようになったのが、イングランドとの国境に程近く、交通網の整備が進み、結婚屋が真っ先にイングランドから移り住んだとされるグレットナ・グリーンであり、グレットナ・グリーンと聞くだけで人々は駆け落ちを連想する、まさに駆け落ち婚の代名詞となっていった。

1-2 グレットナ・グリーン婚の実態

グレットナ・グリーンへの駆け落ちが流行した社会背景を抑えたところで、次に実際にはどのような人々がイングランドからグレットナ・グリーンへと結婚をしに行ったのか、グレットナ・グリーン婚の実態を見ていきたい。

英米文化学会編『英文学と結婚』では、イ

ングランドから駆け落ちしてきた男女を①法律で禁止された結婚をしに来る者たち、②法的にはイングランドで結婚することが可能であるがイングランドで結婚したくない者たち、という2つのグループに分けている。ここでは、その分類を用いて、グレットナ・グリーン婚の実際の事例や具体例を見ていく。②のグループに関して、この例は本論文でテーマとするグレットナ・グリーンへの“駆け落ち”ではないのではないか、という指摘があるかもしれないが、ここでは次節においてリディアの駆け落ち騒ぎとグレットナ・グリーン婚の実態を比較し、リディアの駆け落ち騒ぎがいかに実態にそぐわないかを述べるための材料として考えているため、イングランドからスコットランドへ結婚をするためにやってきた人というくくりでとらえておくこととする。

ではまず①法律で禁止された結婚をしに来る者たちであるが、具体的に言えば21歳未満で親の合意を得られない者たちや、宗教・階級の違いから周囲に反対され国教会式教会挙式婚で結婚できない者たちがあげられる。以下にあげる事例は、グレットナ・グリーン駆け落ち婚の代表的古典として語り継がれてきている実際の2つの事例である。

まず一つ目は、1782年のセアラ・アン・チャイルドとウェスモランド伯爵の駆け落ちである。セアラ・アンはイギリスでも指折りの銀行家チャイルド家の一人娘で、贅沢な暮らしをほしいままに楽しむ17歳の美しい乙女であり、一方、ウェスモランド伯爵は15歳で爵位を継いだが、チャイルド氏に金策を頼む23歳の金欠貴族であった。ウェスモランド伯が金策に銀行家のチャイルド氏を訪ねたことから、セアラ・アンとの交際が始まるが、父チャイルド氏は花婿には事業をついで大きくしてくれるような実業家を望んでいた。ところが、チャイルド氏は、ある日ウェスモランド伯から「相思相愛の娘がいながら、その父親に結婚を反対されるような場合にはどうすればい

いだろうか。」と尋ねられ、わが身に降りかかる事態になろうとは思いません、「グレットナ・グリーンへ行けばいい」と言ってしまう。そこでウェスモランド伯は、セアラ・アンとともに駆け落ちを実行する。チャイルド氏の激しい追跡を振り切り、2人は結婚式をあげ既成事実をつくり、しぶしぶチャイルド氏に結婚を容認させた。皮肉にも、その60年以上もあと、財産を相続したセアラ・アンとウェスモランド伯の娘が生んだ子、つまり2人の孫娘であるアディラも17歳にして士官の男とグレットナ・グリーンへ駆け落ちしたという。駆け落ち婚の隔世遺伝などと呼ばれる事例である（岩田、84-88）。

二つ目の事例は1826年のエレン・ターナーとエドワード・ギボン・ウェイクフィールドの駆け落ちである。エドワード・ギボン・ウェイクフィールドは後年、オーストラリアやニュージーランド、カナダで移民問題に心を砕き、これらの国においては建国を助けた歴史的人物とされているが、若いころはその頭脳を悪知恵に働かせていた。そんな彼は二度もスコットランドへの駆け落ち婚をしている。まず一度目は、20歳のころ、彼はロンドン近郊に暮らすイライザ・スーザン・バルト嬢に恋をした。バルト嬢は、父親から莫大な遺産を譲られた女相続人であり、金も将来性もないウェイクフィールドには手の届かない存在であった。しかし、彼はバルト嬢のおじに取り入ることで彼女に近づき、彼女の心を持ち前のルックスと知性で魅了し、スコットランドへの駆け落ちを実行した。この結婚によって、ウェイクフィールドはジェノア公使に着任するも、妻のイライザが産産時に亡くなってしまい、そのうち生活に行き詰ってしまう。その状況を打開しようと彼は、金持ちの娘との駆け落ちを企てた。二度目の駆け落ちの相手は、当時15歳で女子寄宿学校生のエレン・ターナーであった。エレンの父親のターナー氏は絹織物が盛んであった当時、絹織物

の工場主をしていた。ある日寄宿学校にエレンの母親が倒れたのですぐ帰宅するように、との手紙が届く。しかし、これはウェイクフィールドが仕組んだ偽の手紙であり、当然迎えに差し向けられた馬車もウェイクフィールドの差し金であった。途中立ち寄った宿にてエレンが休憩していると、ウェイクフィールドが現れ、母親が病気であるというのは嘘であり、本当は父親が破産の危機にあり、エレンとウェイクフィールドが結婚することで財産の保全を図ることになったと言葉巧みに彼女を騙し、馬車をスコットランドへ向かわせ、到着するまでにエレンを言いくるめ、まんまとグレットナ・グリーンにて結婚式を挙げた。しかしその後、事件が発覚し、裁判沙汰となり、ウェイクフィールドは有罪判決を受ける（岩田、93-99）。

この2つの事例の特徴を見ていくと、一つ目の事例は身分の差による親の同意を得られない末の駆け落ち婚といえる。そして二つ目の事例については、一回目は、身分の差、親の同意を得られない末の駆け落ち婚に、二回目は、持参金や財産目当ての誘拐婚にあたる。

当時このような者たちによる駆け落ちがジャーナリズムによって取り上げられることで、グレットナ・グリーンは周囲や親の反対を押し切り、さまざまな障害を乗り越えてまで愛を貫きとおそうとするロマンチックな駆け落ち婚の場となっていた側面がある。

これらの事例のように、話題性や注目度のある駆け落ちはジャーナリズムの格好のネタとなり、人々の関心を煽るように書き立てられた。そして、「イギリス文学に登場する恋に恋するヒロインたちは、当初の目標『恋愛結婚』を、18世紀後半には『スコットランド駆け落ち婚』へとシフトさせていった」（岩田、22）と述べられるように、イギリス文学作品の中に、グレットナ・グリーンが取り上げられるようになっていった。上流階級の大人たちには財産の流出や爵位の継承に影響を与えか

ねない厄介な問題であったが、少女たちの中にはイギリス文学のヒロインたちのように駆け落ち婚に対する憧れめいた思いを持つものも少なくなかった。

しかし、そのようなロマンチックな駆け落ち婚は、階級の差、財産の継承問題など両親の同意が得られないような状況や、逃避のための資金、馬車を用意できるなど、どちらかが裕福であることが多かった。民衆の関心を高め、ジャーナリズムが書き立てるような話題性のあるグレットナ・グリーン駆け落ち婚の裏に、法的にはイングランドで結婚することが可能ではあるが、イングランドで結婚したくない者たちという②のグループに分類される人々がいた。

このグループの人々は、①の事例に代表されるような裕福な逃亡者ではなく、さまざまな事情で、安価で、すばやく、しかも婚姻予告を公表したりせず、第3者からの妨害もなく夫婦になりたいと願っていた平凡な人々であった。たとえば、個人的な問題や経歴から教会で婚姻予告を公表したくない者や旅費等を考慮してもイングランドで結婚するよりグレットナ・グリーンでの結婚のほうが安くつく者たちなどである。また時間的制約により迅速に結婚したいという労働者も多かった。グレットナ・グリーンからわずか15キロのところにあるイングランドのカーライルという都市では、毎年ハイアリング・デイという就職相談会フェアが開かれ、屋台なども軒を連ねるのだが、この日は数少ない労働者の休日であり、毎年50組ほどがグレットナ・グリーンで結婚していたと記録されている（松下、276）。

1-3 小説の中のグレットナ・グリーン

1-3-1 リディアのグレットナ・グリーン駆け落ち騒ぎの概要

リディアはベネット家5人姉妹のうちの末娘で、持参金、相続財産をほとんど持たない16歳の少女である。一方ウィカムは、魅力的

な容姿と人当たりのよさで多くの女性を惹きつける義勇軍の兵士で、当初エリザベスもその魅力に惹かれた一人であった。しかし、ベネット家と出会う以前、ダーシーの父から、遺産1千ポンドと牧師職に就く権利を世話してもらったにもかかわらず、ダーシーの父が亡くなると、牧師職の権利を放棄する代わりに3千ポンドを受け取り、遊び暮らした。そしてその後生活に困ったのか放棄したはずの牧師に推薦してほしいと再びダーシーに要求し、断られると、ダーシーの根も葉もない悪口を言いふらし、ダーシーへの逆恨みのための復讐と3万ポンドの遺産目的に15歳のダーシーの妹をたぶらかし、駆け落ち未遂を犯した過去があった。さらにリディアとの駆け落ち時においても、賭博による借金で夜逃げを余儀なくされているような状態であり、要するに金にも女にもだらしない放蕩者である。

ウィカムの所属する連隊がロンボーンの近くのメリトンに駐留しに来た際、ベネット夫人とキティ（4番目の娘）、リディアは兵士たちの話題ばかりで、舞踏会などでたびたび交流するようになるが、ウィカムの連隊はメリトンからブライトンへと行くことになる。連隊の移動を知ったリディアは自分もブライトンへ行きたいと駄々をこねる。都合よく連隊大佐の夫人ミセス・フォースターと親しかったリディアは夫人に誘われ、ブライトンへとついていき毎日兵士たちを追いかけ遊びまわるうちに、ウィカムと親しくなり、ある日置手紙を残していなくなるのであった。

You will rough when you know where I am gone, and I cannot help laughing myself at your surprise tomorrow morning as soon as I am missed. I am going to Gretna Green, and if you cannot guess with who, I shall think you a simpleton, for there is but one

man in the world I love, he is an angel. I should never be happy without him, so think it no harm to be off. You need not send them word at Longbourn of my going, if you do not like it, for it will make the surprise the greater, when I write to them, and sign my name Lydia Wickham. What a good joke it will be. I can hardly write for laughing. (Austen, 291)

この手紙から2人はグレットナ・グリーンへ向かったように思われたが、ロンドン南方以降の足跡がたどれず、スコットランドへ向かった形跡はなかった。結局、ロンドンの片隅に潜伏していたのだが、この駆け落ち騒ぎは、ダーシーがウィカムの借金をすべて肩代わりし、リディアの持参金を明らかにすることでウィカムにリディアと結婚するよう説得して収拾をつけた。しかもダーシーはベネット家の人間には誰にも言わないようにと騒ぎ収拾の真実を知る人に口止めをし、黙ってこの駆け落ち騒ぎの尻拭いをした。

1-3-2 リディアの駆け落ちとグレットナ・グリーン婚の実態の比較

リディアとウィカムのグレットナ・グリーンへの駆け落ちの最大の特徴は、それが未遂に終わったことにあるだろう。なぜ未遂に終わったのか、1-2のグレットナ・グリーン婚の実態の特徴と比較して検証する。

なぜ2人はグレットナ・グリーンへ行かなかったのか、と考えていくと、行かなかったのではなく、行くことができなかった当時の2人の状況が見えてくる。それは、金銭問題である。第一に駆け落ち当時、リディアは大佐のところに世話になっていたし、ウィカムも賭博による借金で夜逃げ同然の状態であったことから、英仏海峡に臨む町ブライトンからグレットナ・グリーンへの500 km以上の長

距離にわたる逃避行の経費は2人には到底まかなえなかった。第二に、岩田託子が指摘するように、リディアのように持参金のない娘は「駆け落ち婚」に値しないのである。そもそもハードウィック婚姻法の狙いが、イレギュラー・マリッジによって財産の流出を危惧した上流階級の親たちが娘を自分たちの権限下に置くためのものであったため、貧しい娘には無関係な法であった。この金銭問題の2つの点を考えると、2人の駆け落ちは1-2の①のグループに見られる身分の差・財産目当ての結婚の分類には当てはまらない。では、同じく①の親の同意を得られない末の駆け落ち婚の線はどうかというと、リディアがウィカムと親しくなったとき、ベネット夫人は、ウィカムがどんな相手であるかなどは眼中になく娘の一人が片付くと大喜びしたし、リディアがブライトンへ行くことに対してもベネット夫人は大喜びし軍人たちと親しくなることを期待もしており、父親ベネット氏は家が静かになって良いと言い放った。さらにウィカムが金にも女にもだらしない放蕩者であるということは、駆け落ち発覚後にベネット氏と夫人は知ることになるので、2人の恋愛に対する親の反対は表明されていない。

次に②のグループに見られるグレットナ・グリーンで式を挙げるほうが費用的に安いということと時間的制約というのは、グレットナ・グリーンまでの長距離を考えると当てはまらない。また、婚姻予告を公表したり、第3者からの異議申し立てにより邪魔されたりせず夫婦になりたいと願っていたという線は、そもそも2人の、特にウィカムの結婚の意志に疑問が残る。リディアとウィカムを説得しにロンドンまで来たダーシーとの会話の中でリディアは、"Lydia absolutely resolved on remaining where she was. She cared for none of her friends, she wanted no help of his, she would not hear of leaving Wickham" (Austen, 322) と言っているため、リ

ディアには愛情も結婚の意志もあったように思われるが、一方のウィカムはどうであったのか。

He confessed himself obliged to leave the regiment, on account of some debts of honour, which were very pressing; and scrupled not to lay all the ill-consequences of Lydia's flight, on her own folly alone. (Austen, 323)

以上から明らかなように、そもそもウィカムはリディアと結婚する気などまったくなかった。さらに、ウィカムはどこかほかの土地で金持ちの女と結婚して、うまく財産を得てやろうという魂胆があることもほのめかしていた。いかにもリディアが勝手についてきて自分には関係ないという言い草であった。この点から互いに愛し合ってグレットナ・グリーンへの駆け落ちに走ったのではないことは明白である。

最終的には、2人はダーシーの尽力によって結婚するのだが、上記で述べてきたようにリディアとウィカムのグレットナ・グリーンへの駆け落ちは、実際のグレットナ・グリーン駆け落ち婚のどのパターンにも当てはまらず、まったく実態にそぐわないものであった。

当時の社会性が垣間見られるこの作品において、目的地をはっきりグレットナ・グリーンと書き示すものの未遂に終わったこの駆け落ち騒ぎは、物語の中でどのように機能しているのだろうか。主要登場人物たちとの比較や物語のプロットから探ることができるのではないだろうか。

2. 姉ジェーンとエリザベスとの比較

2-1 性格の比較

まずは3人の性格を見ていく。長女ジェーンは消極的であり自分の気持ちや感情を表

にはっきりと出さないため、途中恋愛につまずくことになるのだが、誰もが認める美人で頭がよく性格も純真である。その純真さはエリザベスに

"With your good sense, to be honestly blind to the follies and nonsense of others! Affectation of candour is common enough; -one meets it every where. But to be candid without ostentation or design-to take the good of every body's character and make it still batter, and say nothing of the bad-belong to you alone" (Austen, 14-15)

と半ばあきれられるくらいである。しかし、「優等生型のジェーンはその底抜けの善良さゆえに、少々間が抜けて見える」(中尾(b)、28)ものの、「性格も従順で当時の理想的な女性」(塩谷、149)であるとされている。

次女で主人公のエリザベスは、姉ほど従順ではないが、姉以上に鋭い観察力と判断力の持ち主であり、物事を現実的に、そして批判的に見ており、当時の多くの女性とは違い、自分が正しいと思ったことをはっきりと述べることができる女性である。さらに姉妹の中ではずば抜けて頭の回転が速く、茶目っ気がありおかしなことがあれば面白がる性格で、元気潑刺としている。雨上がりでぬかるんだ田舎道をひとりで3マイル歩くくらいは、平気でやってのけるほどの行動力を持ち、キャサリン令夫人の結婚妨害に勇ましく立ち向かうなど「強い意志と独立心をもっている」(吉田、9)人物である。

そしてリディアはというと、末娘だが発育も血色もよく大人びて見えるものの、上の2人とは違い、ベネット夫人に似て無知で怠け者で虚栄心が強い。父親であるベネット氏からも、世にも稀なる大バカ娘であり彼女は世

間で何か大恥をかくまではまともにはならないだろう、と半ば見限られているし、姉エリザベスからも

“Our importance, our respectability in the world, must be affected by the wild volatility, the assurance and disdain of all restraint which mark Lydia’s character” (Austen, 231)

と言われる始末であり、ベネット夫人や3番目4番目の妹とともにベネット家の「愚かさ」の代表的人物である。

上の二人の姉とリディアの差は、物語中でもしばしば話題になり、父親ベネット氏において、

“Whenever you and Jane are known, you must be respected and valued; and you will not appear to less advantage for having a couple of-or I may say, three very silly sisters. We shall have no peace at Longbourn if Lydia does not go to Brighton” (Austen, 231-232)

と言われたり、ダーシーによっても、エリザベスとジェーンの振る舞い、常識、人柄は誰もが感心するところではあるが、ベネット夫人はじめ下の3人の妹の道徳を欠いた礼儀のなさはベネット家の欠点であり、それこそ親友ビングリーとジェーンとの結婚の大きな障害であるとエリザベスにあてた手紙において語られている。終始一貫してその愚かさを露呈し、成長を遂げる様子の見られないリディアはまさにアンチヒロインとして、この小説に存在している。

性格的に長所と短所をそれぞれ持つジェーンとエリザベスであるが、その良識ある性格は、リディアのアンチヒロイン的性質との比較や周囲からの評価から明らかなのであ

るし、その比較によって、リディアの破天荒さは、エリザベスとジェーン両名の常識のある誰もが感心するといわれる人柄というものを強調し引き立てているということが出来る。

2-2 恋愛・結婚の比較

3人の性格の違いを明確にしたところで、今度はそれぞれの恋愛と結婚を見ていく。そこには、良識あるジェーンとエリザベスの二人の幸せな結婚とリディアの実に衝動的で向こう見ずな駆け落ち騒ぎの末の結婚の対照性が顕著にあらわれている。

まずジェーンの相手は、ベネット家から3マイルのネザーフィールドに越してきた資産家のビングリーである。彼は明るい顔に気取りのない態度の好青年で、その呑気さ、明朗さ、素直さのおかげで、“Bingley was sure of being liked wherever he appeared” (Austen, 16) と言われる人物である。ジェーンはそんなビングリーと初対面の舞踏会から共に好印象で互いに惹かれあう。そしてジェーンがビングリーの妹の招待でネザーフィールドを訪れ、悪性の風邪をこじらせてしまった際、ビングリーの優しい気遣いによって2人の距離はさらに近づいたのであるが、どちらも自分の気持ちを相手や第3者に向かってははっきり告げるようなタイプではなかった。そこで、消極的なジェーンの状態から、ジェーンのビングリーに対する愛情は深いものではないと考えたダーシーは、階級意識からビングリーの相手はジェーンではないほうがよいと思い、ビングリーをロンドンへと旅立たせ2人の仲を離してしまう。階級意識とは、家柄の低いベネット家と婚姻関係を結ぶこと、そして人間的愚かさを露呈するベネット夫人やリディアをはじめとする3人の妹たちと家族になることへの危惧であった。離れた2人は相手からの連絡を期待しつつも、どちらからも動こうとはしなかった。最終的には、ビング

リーはネザーフィールドに戻ってきてジェーンに求婚し、ようやく気持ちを確し合ひめでたく結婚となる。自主性にかけるところはあるものの、好一对の美男美女、お人好しの善男善女の結婚であるといえる。

エリザベスの相手は、ビングリーの友人であり莊園当主で年商1万ポンドもあるダーシー。ダーシーは背の高い見事な骨柄、ととのった目鼻立ち、上品な物腰のいい男であるが、傲慢で人づきあいが悪く、気難し屋であった。2人の互いの第一印象は決してよいものではなかった。舞踏会にてダーシーが、心を惹かれるほどの美人ではない、と自分について発言しているのを聞いてしまったエリザベスは、彼の尊大な態度や階級意識に反感を抱く。一方のダーシーは、はじめこそ美人とは思ってもいなく、家柄や家族の問題から自分と同じ世界の人間ではないと見ていたはずのエリザベスの、いたずらっぽく、屈託のない、物怖じしない態度に惹かれていく。そして愛を告白するのだが、エリザベスや彼女の家族を自分より低く見ていること、彼女と結びつくことは人間的下落、家族的障害であるということをも述べた。当然エリザベスは怒りをあらわにし、この高慢で風変わりな求婚を断る。しかし、その翌日にダーシーから手紙を受け取り、エリザベスは自分や家族について少しずつ考えるようになっていく。ダーシーや一時自分が惹かれていたウィカムに対する誤解や偏見に気づいていく中、リディアとウィカムの駆け落ち騒ぎが起こる。この駆け落ち騒ぎがエリザベス、ダーシーの双方にとってとても大きな心の変化をもたらすことになり、駆け落ち騒ぎの收拾やキャサリン令夫人の結婚妨害などを経て、2人は高慢さや偏見といったものを改めていき、結ばれる。

では、最後に、まさにダーシーがジェーンとビングリーを引き離そうとした理由のひとつであるベネット家の愚かさの代表的人物、末娘リディアと、経済的にも人格的にも破綻

しダーシー家に散々迷惑をかけてきたウィカムの恋愛と結婚についてであるが、ここでは、結婚が決まったとき、そして結婚後の二人について述べる。まず、この結婚に対する周囲の反応は、当人たちやベネット夫人を除いて、夫婦愛などとは無縁の結婚であるとか、不幸になるに決まっているというものばかりだった。現に、リディアとウィカムの結婚後の状態はとても幸せとは言えるものではなかった。そのことは以下から明らかである。

Such relief, however, as it was in her power to afford, by the practice of what might be called economy in her own private expenses, she frequently sent them. It had always been evident to her such an income as theirs, under the direction of two persons so extravagant in their wants, and heedless of the future, must be very insufficient to their support; and wherever they changed their quarters, either Jane of herself were sure of being applied to, for some little assistance towards discharging their bills.[...] His affection for her soon sunk into indifference; her's lasted a little longer. (Austen, 387)

資産家ビングリーと結婚したジェーンや莊園当主ダーシーと結婚したエリザベスの金銭援助によって生活していること、元より深い結びつきのなかった愛情もさらに薄れていることがわかる。加えて、ダーシーは、妻のエリザベスのためもあってウィカムの職の世話なども度々してやっていた。結婚するに至る過程においても、結婚後の生活においてもリディアとウィカムは、周囲の援助なしには生活すら間々ならない、幸せな結婚とは程遠いカップルなのである。

このようにジェーン、エリザベス、リディ

アの3人の恋愛・結婚をそれぞれ見ていくと、それぞれのキャラクターに見合った結婚相手が現れ、恋愛、結婚もまさに三者三様であるように思われる。しかし、それぞれの内面の成長とともに結婚にいたったエリザベスとダーシーや、別離に耐え結ばれた引っ込み思案だが心優しいジェーンとビングリーの二組の結婚の裏に、自分たちが周りにかけた迷惑すら省みずやりたい放題で問題視されているリディアとウィカムの結婚があることによって、性格の対比同様に二組の幸せな結婚に対比効果が与えられ、引き立てられているということがわかる。

3. 駆け落ち騒ぎがもたらす変化

3-1 エリザベスの心的変化

ダーシーの求婚を断った翌日に受け取った彼からの手紙やその後見た彼の態度に対し、だんだんと彼への見方が変わっていくエリザベス。そんなときのリディアの駆け落ち事件は、エリザベスにとって、自分の気持ちに気づき、自己と向き合うきっかけとなった。

このリディアの駆け落ちに際してエリザベスは、

Every thing must sink under such a proof of family weakness, such an assurance of the deepest disgrace.[...] never had she so honestly felt that she could have loved him, as now, when all love must be vain. (Austen, 278)

と、ダーシーに対する自分の正直な気持ちに気づくのである。エリザベスはダーシーへの愛をこの駆け落ち事件によってはっきり認識したのだ。

また、「リディアの駆け落ちは、エリザベスに自己を再認識する契機を与えた。それは、自己の〈家庭〉の本質——自己の存在の場で

あり、自己を育てた土壌としての〈家庭〉の本質を再認識することであった」(吉田、29)と指摘されるように、エリザベスは、ダーシーから受け取った手紙において指摘されていたベネット夫人やリディアをはじめとする下の3人の妹たちの愚かさをこの駆け落ち騒ぎによって改めて認識し、その愚かさに以前よりも敏感になった。それは、リディアとウィカムが結婚することとなりロンドンからベネット家へと戻ってきた際、自分たちの駆け落ち騒ぎへの恥じも反省も全くなく、厚かましく平然と振舞う2人や、娘の一人が結婚することになったというその事実のみに浮き足立っているベネット夫人に対し、恥ずかしさと苛立ちを感じたと同時に、以前には思ってもみなかったウィカムのリディアに劣らぬ図々しさ、見かけだけの面の皮の厚さ、そして非常識ぶりをはっきり見てとったことにあらわれている。

また、リディアの駆け落ちを知り、ダーシーからの手紙によってウィカムの人間性に気づいていながら家族に伝えずにいた自分に責任を感じ、防げたかもしれないと嘆くと共に、エリザベスは、家族や他人の愚かさを嘲笑していた自分の無責任さを悔いた。そして、そのことは、家庭の中にあるその愚かさから自分自身も決して切り離れてはいなかったこと、ウィカムやダーシーを見た目や人当たりだけで判断していたように、判断力や観察力を自負するあまり自ら偏見におちいつていたという自分の愚かさに気づいたということの意味しているといえるのではないだろうか。エリザベスは、この駆け落ち騒ぎによって多くを学び、精神的成長を遂げたと言える。

3-2 ダーシーの心的変化

リディアとウィカムの駆け落ちを通して、成長を遂げたのはエリザベスだけではない。ダーシーにとってもこの駆け落ち騒ぎは彼の心の変化を証明するものであった。初めのこ

ろダーシーは自らの性格をこう述べている。

“I cannot forget the follies and vices of others so soon as I ought, nor their offences against myself. My feelings are not puffed about with every attempt to move them. My temper would perhaps be called resentful. —my good opinion once lost is lost for ever.” (Austen, 58)

この発言は前述したベネット家の愚かさや過去にウィカムがしてきたことなどに言及している。自己分析のとおりダーシーは、エリザベスへの最初の告白のときに、彼女の家柄や家族の否定、彼女との結婚によって自分の人間性の下落を危惧する発言をしたし、駆け落ち騒ぎが起こるまでウィカムとの関わり合いを全く持とうとしなかった。そんなダーシーが、過去にさんざん不道德な行為で自分をてこずらせダーシー家に迷惑をかけてきたウィカムのために大金を出して、リディアとの結婚を取り計らってやったことは、大きな変化である。それはエリザベスの気を引くためになされた行為なのではないか、という指摘があるかもしれないが、もちろん、ダーシーがエリザベスを思って彼女のためにこの駆け落ち騒ぎを収拾したことを否定はしない。しかし、それはエリザベスを振り向かせたいが為の行為であつたり彼女からの恩恵を期待していたりと見返りを求めていたわけではない。そのことは、自分の関わりを一切エリザベスや他のベネット家の人間には知られないように、リディアやウィカムはもちろんベネット家の親戚であるガーディナー夫妻など、駆け落ち騒ぎの収拾の真実を知る全員に口止めをし、この駆け落ちを収拾したのはガーディナー氏であるとしたことから明らかである。階級や社会的地位に対する意識が強く高慢なダーシーが、自分よりもはるかに低俗で目に

余る愚かさを露呈するベネット家の中にいるエリザベスのためにロンドンへ奔走したことは、ベネット家との身分の差や家族の愚行という障害を乗り越え、エリザベスへの真の愛情を持ちえたということを表している。この点に関してはダーシーによる駆け落ち騒ぎの収拾を「彼の人柄が大きく変わり、好ましい人間になったことを十二分にしめすものであろう」(宮崎(a)、62)と指摘があるように、彼が自分自身の高慢さと向き合い、他人の愚かさや悪徳に対して許容範囲を広げたということの意味しているといえる。

さらに、ダーシーの妹をたぶらかし、金にも女にもだらしないウィカムであるが、吉田良夫は、ダーシーとウィカムは幼友達であるばかりか、先代のダーシー氏はウィカムを自分の費用で育て、ウィカムはいわば家族の一員としてダーシー家に遇されていた、つまりダーシー家の中にウィカムの悪徳を生む下地が少なからず存在していたのではないかと指摘している(吉田、31)。そう考えると、ダーシーがリディアとウィカムの駆け落ちに際し、過去の妹とのことを思い出し、ウィカムを育てたダーシー家の責任を感じロンドンに2人を説得しに行ったということが出来る。ダーシーは自己の内面やウィカムの悪徳、ひいては自分の高慢さを生み出したダーシー家の潜在的な性質に対しても、この駆け落ち騒ぎをとおして目を向けることができたといえるのではないであろうか。

結論

以上、リディアとウィカムのグレットナ・グリーンへの駆け落ち騒ぎの効果と役割について、当時のグレットナ・グリーン駆け落ち婚の実態との比較や物語のプロットからの分析、考察をおこなってきた。2人のグレットナ・グリーンへの駆け落ちは、当時の実態には全くそぐわないものであった。1-2においても触

れたように、当時のグレットナ・グリーン駆け落ち婚には、文学少女たちが憧れるようなロマンチックな愛の場としての側面が確かに存在した。けれども、この『自負と偏見』において、アンチヒロインであり愚かさの象徴であるリディアがおこなったグレットナ・グリーンへの駆け落ちは、その愚かさ、厚かましさを存分に強調する行為として描かれた。あえて駆け落ちの地をはっきりとグレットナ・グリーンと断定しながらも未遂に終わったりリディアの駆け落ち騒ぎ、そこにはグレットナ・グリーンが、常にジャーナリズムがこぞって取り上げるような、当時の小説の中に登場するヒロインたちが夢想するような、愛を貫くロマンチックな駆け落ちの場としてのみ存在するのではない、という一種のアイロニーが垣間見える。

また、オースティンの描く小説の多くは、主人公が紆余曲折を経て幸せな結婚をするまでがその中心である。『自負と偏見』におけるリディア・ベネットのように、破天荒で愚かな性格、そして周囲の迷惑を省みない末の結婚は、オースティンの描く小説において、主軸となりはしないであろう。しかし、小説の中で彼女の存在が果たす役割は非常に大きい。アンチヒロインとしてのリディアの存在があることにより、主要登場人物たちの個性やキャラクターが生かされているといえるし、エリザベスとジェーンの、いわば幸せで理想的な結婚の裏に、リディアのグレットナ・グリーンへの駆け落ちが描かれていることによって、オースティンが自身の小説において描き続けた幸せな結婚が大いに際立っている。この小説において、さまざまなことを通し、人間味のある成長を遂げていくエリザベスとダーシーの姿とその成長の過程、そして彼らが互いに想いを通わせる姿を、私たちはリディアの存在、リディアの駆け落ちによっていっそう強く読み取ることができるのである。

参考文献

- 岩田託子『イギリス式結婚狂騒曲 ― 駆け落ちは馬車に乗って』中公新書、2002 年
- 内田能嗣、塩谷清人『ジェイン・オースティンを学ぶ人のために』世界思想社、2007 年
- オースティン、ジェーン『自負と偏見』中野好夫訳、新潮文庫、1999 年
- 門田守『『自負と偏見』における男と女 ― ヒロインの成長と父性主義の原理』鳥取大学教育学部編、『鳥取大学教育学部研究報告』第 43 巻第 2 号、129-160 頁
- 川口能久『『高慢と偏見』論 ― エリザベスとダーシーについて』立命館大学英米学会編、『立命館英米文学』第 14 号、15-29 頁
- 倉持晴美『十九世紀英国小説 ― 女性と結婚』荒竹出版、1986 年
- 塩谷清人『ジェイン・オースティン入門』北星堂書店、1997 年
- ギリス、ジョン・R『結婚観の歴史人類学 ― 近代イギリス 1600 年～現代』北本正章訳、勁草書房、2006 年
- ストーン、L『家族・性・結婚の社会史 ― 1500 年-1800 年のイギリス』北本正章訳、1991 年
- 直野裕子『ジェイン・オースティンの小説：女主人公をめぐる』開文社出版、1986 年
- 坪松邦枝『ジェイン・オースティンの結婚観についての一考察 ― 作品の登場人物の結婚をめぐる』日本大学生産工学部編、『日本大学生産工学部報告 B』第 19 号、25-34 頁
- 都留信夫『イギリス近代小説の誕生 ― 十八世紀とジェイン・オースティン』ミネルヴァ書房、1995 年
- 中尾真理(a)『ジェイン・オースティン ― 小説家の誕生』英宝社、2004 年
- ――(b)『ジェイン・オースティン ― 象牙の細工』英宝社、2007 年
- 長谷信子『Jane Austen における「駆け落ち結婚」と「秘密婚約」』大阪産業大学学会編『大阪産業大学論集。人文科学編』第 94 号、47-55 頁
- 松下春彦『グレットナ・グリーン ― 『駆け落ち婚』の聖地』英米文化学会編、『英文学と結婚 ― シェイクスピアからシリトールまで』彩流社、2004 年、259-283 頁
- 宮崎孝一(a)『オースティン文学の妙味』鳳書房、1993 年
- ――(b)『ジェイン・オースティン『自負と偏見』

成城大学文学部編、『成城文藝』第15号、78-96

頁

吉田良夫『英国女性作家の世界』大阪教育図書、2004

年

Jane, Austen. *Pride and Prejudice*. London: Oxford University Press, 1932.